

2024  
11.15

NEWS

CIT

千葉工業大学 入試広報部  
CHIBA INSTITUTE OF TECHNOLOGY〒275-0016  
千葉県習志野市津田沼2丁目17番1号  
TEL 047(478)0222  
FAX 047(478)3344

[ NO.689 ]

校章は、創立直後の昭和17年、公募によって制定され、平成4年、創立50周年に伴い、商標登録されました。新しいNEWS CITはスクールカラーの「紫紺」をベースに、さわやかなスカイブルーカラーでお届けします。

<https://www.it-chiba.ac.jp/>

## 552社673人が参加した「産学懇談会」 本学への期待と信頼の証

本学と企業が親睦を深め、学生の就職について情報交換する「産学懇談会」が11月11日(月)、東京・千代田区のホテルニューオータニ東京で開かれ、552社673人の人事・採用担当者が参加しました。2024年度の入学志願者数が4年連続で全国2位、卒業生数2000人以上の実就職ランキングでも全国2位となった本学のブランド力向上に熱い視線が送られました。産学懇談会は第1部・講演会、第2部・名刺交換会の2部構成で行われ、本学からは瀬戸熊修理事長、伊藤穰一学長をはじめ、教職員らが総出で企業の人事・採用担当者らに対応しました。挨拶に立った伊藤学長は、多様な教育機会の提供や国際的な人材育成などを目的に本学と米アリゾナ州立大学(ASU)が提携協定を締結したことを紹介し、「我々の学生の英語力を強化したい」と語り、早ければ2026年にも新たな大学院設置を目指す考えを表明しました。また、スタートアップ企業創出の重要性に触れ、「スタートアップはイノベーションの効率が良い。どのようにサポートしていくのか大学で考えている」と説明しました。(P2へ続く)

P2 552社673人が参加した産学懇談会/C1ロケット2号機の打上実験に成功

P3 千葉工業大学とブータン王国政府技術庁が宇宙科学技術分野で協力覚書(MOU)を締結/三浦研究室が熱工学コンファレンス2024で「熱コレ2024最優秀動画賞」を受賞/International Student Symposiumで廣瀬さんが「ゴールド賞」、石川さんと杉柳さんが「シルバー賞」を受賞

P4 布施さんが優秀ポスター発表賞を受賞/第36回日本インテリア学会大会で学生優秀発表賞を受賞/半導体プロセスに関する国際会議でMost Impressive Poster Awardを受賞/日本水処理生物学会第60回大会でベストプレゼンテーション賞を受賞/教育センターの中村助教がサントリー学芸賞を受賞

P5 fuRoメンバーが「第11回ロボット大賞」で優秀賞を受賞/信川教授がIEEEのシニア会員に昇格/第37回全日本理工科系学生空手道選手権大会開催

P6-7 海外研修体験記[アメリカ英語研修プログラム][モンゴルサマースクールインターンシップ]/新習志野キャンパスで祭典「Share」を盛大に開催!

P8 熊本県内2校と包括的連携協定を締結/コラム

## 産学懇談会 第1部講演

### 開発の苦勞を乗り越え、世界中の医療に貢献



第1部でのランガー氏による記念講演

第1部では、米マサチューセッツ工科大学（MIT）教授として最高の荣誉であるインスティテュート・プロフェッサーを授与され、薬物送達システムや組織工学、ナノテクノロジーの分野で大きな業績を挙げているロバート・サミュエル・ランガー氏に対し、本学から名誉博士称号が授与されました。ランガー氏による「ナノテクノロジーからmRNAワクチンへ～懐疑と障壁の克服が生み出した新たな癌治療法と世界的健康問題への対策～」と題した記念講演では「何か人々を助ける仕事ができないかと考えた」と医療の進歩に貢献してきた歩みを紹介しつつ、最初は多くの大学にアプローチしたものの良い返事がなかったと説明。

1974年に薬剤送達システムなどの研究を始めたが、「誰もが無理だ。上手くいくはずがないと言った」と苦勞を振り返りました。研究で生じた特許を用いて企業と癌治療薬などを生み出したランガー氏は「いつかタンパク質の領域で私たちは革命を起こすだろうと思った」と自信を深め、2020年からの新型コロナウイルス感染拡大時には「モデルナ社は批判もされたが、ワクチン開発の取り組みをやめなかった。94%の効果があるとわかり、世界中でワクチンが使われることになった」と意義を強調しました。最後に「皆様にも是非、バイオエンジニアリングをやってもらいたい」とエールを送りました。

## 社会変革へのスピーディーな対応に産業界からも大きな期待

一方、第2部では企業と本学の各学部・学科の就職担当教員との間で名刺交換会が行われ、瀬戸熊理事長は挨拶で「9月に提携したアリゾナ州立大学は、半導体分野では全米ナンバーワン。2025年4月に本学は『機械電子創成工学科』を『宇宙・半導体工学科』に進化させることになった」と説明。2023年度卒業者の実就職率が95.4%。採用を増やしたい大学ランキング全国私立大学2位となったことに感謝した上で「毎年、何かをやらないと気が済まない大学。それも皆様のおかげであり、引き続き本学の学生を採用していただきたい」と呼びかけました。

続いて、TDK株式会社人財本部国内人財開

発統括部人事部長の長谷部公一氏による乾杯の音頭で情報交換会がスタート。本学が2024年4月に「情報変革科学部」と「未来変革科学部」をスタートさせるなど、加速する社会変革の流れに迅速な対応をしていることに期待と信頼が寄せられ、各学科のブース前には企業の参加者らによる長い列が見られました。



学科の教員らとの名刺交換会に長蛇の列



膝を交えて情報交換をする教員らと人事担当者



第2部でお礼の言葉を述べる理事長

## 観測ロケットC1ロケット2号機の打上実験に成功

惑星探査研究センター非常勤首席研究員、機械電子創成工学科の和田豊教授および同研究室の学生たちは、AstroX株式会社との共同研究により、11月9日、福島県南相馬市にて観測ロケットC1ロケット（※1）の2号機打上実験に成功しました。本学では2018年から、高度100kmの宇宙空間に到達し、大気圏上層から固体微粒子や微生物を採取する小型観測ロケットの開発に取り組んでいます。本プロジェクトでは、安全性が高く低コストで即時発射が可能なハイブリッドロケットの設計と試料採取装置の実用化を目指しています。

今回の打上実験では、試料採取装置搭載を見据えた10kgのダミーペイロードを搭載し、高度8kmを目標に発射しました。ロケットは発射か

ら約22秒後に燃焼を停止し、1号機を上回る約7kmの到達高度を記録しました。この結果は、次回以降の実験に向けた重要なデータとなり、さらなる高高度化を進める基盤を構築しました。

打上は、40フィートコンテナに収められた発射台から実施され、洋上および上空の安全を確認した後、遠隔操作により推進剤を充填し、点火、打ち上げを予定通り実施し、陸上からの打ち上げに成功しました。ロケットは、約22秒後に燃焼の停止が確認され、到達高度は1号機よりも1kmほど高い約7kmとなりました。

今後、年1回程度のペースで発射実験を継続し、観測ロケットの性能向上を図ります。

※1: AstroX株式会社のプレスリリースではFOX1号機と呼称されています。





## 千葉工業大学とブータン王国政府技術庁が 宇宙科学技術分野で協力覚書(MOU)を締結

2024年9月30日、本学とブータン王国政府技術庁(GovTech)は、宇宙科学技術分野における協力と学術交流に関する覚書(MOU)をブータンのパロで締結しました。この覚書は、2023年12月に千葉工業大学、GovTech、そしてブータン王国政府の持株投資会社であるドゥルック・ホールディング・アンド・インベストメンツ(DHI)との三者間で締結された包括的な連携協定を基にしたもので、特に宇宙分野に焦点を当てています。今後、ブータンで製作した衛星実験機器を、本学の高度技術者育成プログラムで製作した超小型衛星に搭載し、共同で宇宙実験を実施する計画です。

同プログラムは、2021年4月に開設され、学

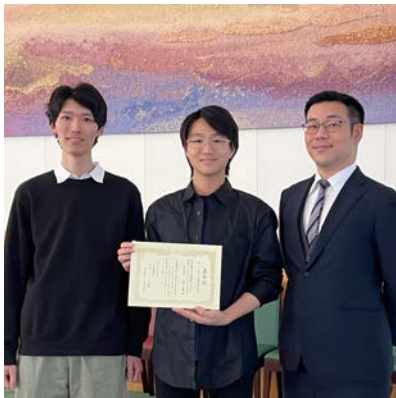
生が自ら衛星の製作から運用までを行う実践的なプログラムです。これまでに「KASHIWA」や「SAKURA」といった超小型衛星の打ち上げミッションを成功させ、12月中に新たに「YOMOGI」の打ち上げを予定しています。GovTechはブータン王国政府が設立した機関で、宇宙関連活動や技術人材育成などを担い、技術先進国の創造を目指しています。また、DHIはブータン唯一の政府系持株会社として、国内外で様々な分野の企業に投資を行っています。

今回の覚書締結により、本学とブータンは、宇宙科学技術分野における国際協力をさらに深化させ、技術革新と人材育成を通じて、持続可能な社会の実現をめざします。



ブータン王国政府技術庁 ジグミ・テンジン技術庁長官(左)と伊藤穰一学長

## 三浦研究室が熱工学コンファレンス2024で 「熱コレ2024最優秀動画賞」を受賞



左から阿原さん、伊藤さん、三浦助教

去る10月5日に開催された日本機械学会熱工学コンファレンス2024にて、機械工学科の三浦正義助教、大学院修士1年の伊藤生織さん、学部4年の阿原佑利さん、(いずれも三浦研究室)、菊池隼人さん(OB)、人見悠斗さん(OB)、伊東弘行教授(神奈川大学)が、「熱コレ2024最優秀動画賞」を受賞しました。

同賞は、研究成果や教育用に独自に作成された動画を披露する、熱工学コンファレンス内のセッション「熱工学コレクション」で発表された動画の中から、投票によって授与されるもので、三浦助教らが発表した「細管流路内を往復振動する液柱の高速度ビデオカメラによる追従撮影」は、最も印象的であると高く評価され

ました。研究では、自励振動ヒートパイプの熱輸送量を予測する上で重要な液膜形成の過程を解明するもので、流路内の液柱先端形状と液膜形成の時間変化を高速度カメラで観察し、振動条件との関係を明らかにしました。

三浦助教は「本研究は、学生たちとともに、実験装置をゼロから設計・製作し、試行錯誤を重ねて進めているものです。実験装置の製作の際には、工作センターの職員の方々からご指導とご協力をいただき感謝しております。今回の受賞を励みに、より一層研究に邁進し、細管流路内における液膜形成の現象解明に貢献したいと考えています」と話しています。

<https://youtu.be/ptA6P1hKJsA>

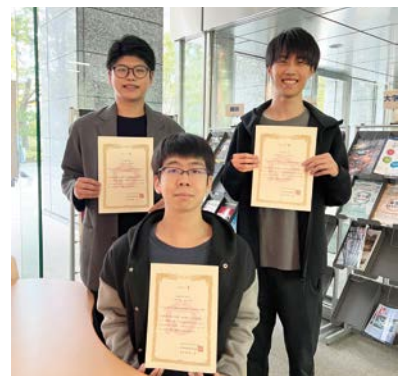
## International Student Symposiumで 廣瀬さんが「ゴールド賞」、石川さんと杉柳さんが「シルバー賞」を受賞

去る8月25日、環太平洋大学にて開催されたInternational Student Symposiumにおいて、優秀発表者賞として廣瀬和彦さん(大学院応用化学専攻修士課程1年)が「ゴールド賞」を、また、石川翔太さんと杉柳慧さん(同専攻同学年・いずれも松田泰明研究室)が「シルバー賞」を受賞しました。

廣瀬さんの研究題目は「Benitoite型リン酸塩のプロトン導電特性と熱安定性」で、シンプルな結晶構造図を用い平易な言葉で説明するよう工夫しました。石川さんは「NaNi<sub>1-x</sub>LixHx(PO<sub>3</sub>)<sub>3</sub>·yH<sub>2</sub>Oの中温域における熱安定性とプロトン導電特性」をテーマに、多角的な評

価で電池材料としての魅力を明らかにしました。杉柳さんは「Li<sup>+</sup>/H<sup>+</sup>交換反応の規則岩塩型酸化物のイオン導電率への影響」に関し、評価したい部分に応じて、物質の同定手法や電気化学測定の手法や工夫し研究に取り組みました。いずれも次世代電池のための新素材の開発に関する研究で、既存の材料をはるかに凌駕する性能を発現する新規物質の開発や新素材の性能の発現要因の解明を行なっています。

廣瀬さんは「質疑応答で多くの助言を得られ、成長できた」、石川さんは「評価していただけて光栄」、杉柳さんは「努力した成果を認められ嬉しい」と喜びを語っています。



左から石川さん、杉柳さん、廣瀬さん

## 布施さんが 優秀ポスター発表賞を受賞



先端材料工学専攻修士 布施 直哉 さん  
〔田村 洋介 研究室〕

先端材料工学専攻修士2年の布施直哉さん(田村洋介研究室)が、11月9日、群馬大学太田キャンパスで開催された軽金属学会主催の研究発表会で「優秀ポスター発表賞」を受賞しました。研究テーマは「電磁凝固プロセスにより作製したAl-Si共晶合金の引張特性」。アルミニウム合金溶湯に電流と磁場を印加しながら凝固させる「電磁凝固プロセス」を利用し、初晶Siを試料表面全域に偏析させる現象に着目しました。そしてこの現象により、微細な共晶組織が形成され、一般的な共晶組織と比較して強度と延性に優れた材料特性を有することが実証されました。

布施さんは、「院での経験を活かし研究を進めることができました。指導教員の田村先生、研究室の皆様に感謝します」と話しています。

## 第36回日本インテリア学会大会で 学生優秀発表賞を受賞



デザイン科学専攻修士 小池 直哉 さん  
〔橋本 郁子 研究室〕

デザイン科学専攻修士1年の小池直哉さん(橋本郁子研究室)が、11月10日に富山大学高岡キャンパスで開催された第36回日本インテリア学会大会において、「学生優秀発表賞」を受賞しました。

研究テーマは「小学校における余裕教室を活用した学習環境に関する研究」で、十分に有効活用されていない余裕教室内に、普通教室に在籍し特別な支援を必要とする児童のための居場所を作ることで、小学校における学習環境整備の知見を得ることを目的としています。今回の受賞は余裕教室の多面的な活用可能性を示し若手研究者の模範となる優秀な論文が高く評価されました。小池さんは「指導教員の橋本先生、共著者の渡森さん、研究協力いただいた栁田校長に感謝します」と喜びを語りました。

## 半導体プロセスに関する国際会議で Most Impressive Poster Awardを受賞



工学専攻 竹井 慎登 さん  
〔菅 洋志 研究室〕

工学専攻博士後期課程1年の竹井慎登さん(菅洋志研究室)を含む現研究室メンバーが、11月13日、「第37回マイクロプロセス・ナノテクノロジー国際会議(MNC 2024)」の授賞式で、Most Impressive Poster Awardを受賞しました。昨年開催されたMNC2023のポスターセッションでの成果が評価されたもの。

竹井さんを含む研究グループは、ナノ材料「フラレン」を用いた新しいメモリー素子の開発に成功し、フラレン分子が鎖状に結合する「C60鎖」の形成技術を確認。これが記憶素子として機能することを初めて実証しました。この研究は半導体微細化技術に革新をもたらす可能性があり、異分野融合の重要性も示しています。竹井さんは「研究の魅力を多くの方に伝えられてうれしい。菅先生や協力いただいた皆さんに感謝します」と話しました。

## 日本水処理生物学会第60回大会で ベストプレゼンテーション賞を受賞

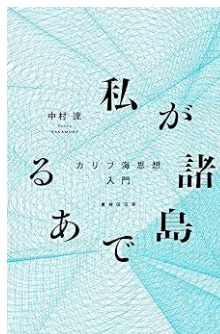


工学専攻 佐藤 颯介 さん  
〔村上 和仁 研究室〕

工学専攻博士後期課程1年の佐藤颯介さんが、11月2日に兵庫県姫路市市民会館で開催された日本水処理生物学会第60回大会において、ベストプレゼンテーション賞を受賞しました。

「マイクロゾムWET試験によるカルシア改質土の固化前後における水質浄化機能変化の比較解析」は、製鋼スラグを主原料とするカルシア改質土の固化前後における水質浄化機能の変化を解析。腐敗アオサ溶出液を対象にした環境毒性解析の結果、カルシア改質土による濾過で毒性が低減され、特に固化後の方が効果が高いことが明らかにしました。この成果が、将来性のある極めて重要な研究と認められました。佐藤さんは「学部4年時の初学会発表以来、積み重ねてきた研究が評価され嬉しいです」と喜びを語りました。

## 教育センターの中村助教が サントリー学芸賞を受賞



著書『私が諸島である』の表紙

教育センターの中村達助教が、第46回サントリー学芸賞(思想・歴史部門)を受賞しました。受賞作は『私が諸島である ―カリブ海思想入門』(書肆侃侃房)。公益財団法人サントリー文化財団は、毎年、広く社会と文化を考える独創的で優れた研究、評論活動を行った個人に対して、著作物を対象に、「政治・経済」「芸術・文学」「社会・風俗」「思想・歴史」の4部門に分け、「サントリー学芸賞」を贈呈しています。

現代思想の「地図」において、空白とされてきたカリブ海に注目し、その思想の独自性と「クレオール」性を鮮やかに描き出した本書



教育センター  
中村 達 助教

は、カリブ文学や文化が生み出す開放的で流動的な思考を提示しています。西洋中心主義を超え、複線的な時間感覚を持つカリブ思想は、他者と共に手を取り合う可能性を示し、暴力的な歴史を超えて新たな価値を創造。本書は、人文学における必読の文献として高く評価されました。

中村助教は「このたび大変名誉ある賞をいただきました。本学は「世界文化に技術で貢献する」という建学の精神を掲げていますが、そのためには「世界」が何を意味するのかを知らなければなりません。本学の学生たちが「世界」を見つけるために歩む学術的旅路に、私の活動が少しでも役に立てばと願っております。今回の受賞を励みに、今後も研究に教育に邁進してまいります」とコメントしています。



選評はこちらからご覧ください。

[https://www.suntory.co.jp/sfnd/prize\\_ssah/detail/202408.html](https://www.suntory.co.jp/sfnd/prize_ssah/detail/202408.html)



## fuRoメンバーが 「第11回ロボット大賞」で優秀賞を受賞



ロボット大賞で優秀賞を受賞したfuRoメンバー



プラント自動巡回点検防爆ロボット「EX ROVR」



つくばチャレンジに参加したロボットと記念写真

経済産業省と一般社団法人日本機械工業連合会が主催する「第11回ロボット大賞」の受賞ロボットが発表され、去る9月18日、東京ビッグサイトにて表彰式が行われました。未来ロボット技術研究センターの吉田智章副所長、荻原一輝主任研究員、松澤孝明研究員、保坂謙史郎客員研究員、西村健志客員研究員が開発に携わったロボットが優秀賞(社会インフラ・災害対応・消防分野)を受賞しました。プラント自動巡回点検防爆ロボット「EX ROVR」(エクスローバー)は、三菱重工業株式会社/ENEOS株式会社/山形大学/東北大学と共同開発したもので、先進的な人工知能技術を活用し、高精度な環境認識と柔軟な動作制御を実現しています。日本国内唯一の使用可能な防爆移動ロボットであり、また、メインターゲットとする石油ガス化学業界の海上プラットフォーム型石油

掘削施設は、省人化・無人化が求められ、今後の発展が期待されます。

また、本学fuRoメンバーや、未来ロボティクス学科の林原靖男教授、上田隆一教授が関わっている[つくばチャレンジ実行委員会]が、日本機械工業連合会会長賞を受賞しました。同委員会は、2007年から毎年、移動ロボットの自律走行技術を実環境で検証する公開実験を開催しており、つくば市内のコースを活用しながら、年々課題を進化させてきました。探索対象の発見、前日通知のチェックポイント通過、荷物配送など、毎年新たな挑戦が追加され、大学や企業など多くのチームが参加。公開実験の場を提供することで、先端技術の実装と検証が繰り返され、参加者の技術は年々向上し、その過程で、実環境における自律走行技術全体の発展に大きく貢献しています。

## 信川教授が IEEEのシニア会員に昇格



情報工学科  
信川 創 教授

Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE) において、情報工学科の信川創教授がシニアメンバーに昇格しました。IEEE(米国電気電子学会)は、人類の利益のために技術を進歩させることに専念する世界最大の技術専門家組織で、世界160カ国以上、40万人を超える会員が分野ごとに分かれ、論文誌の出版や国際会議の開催、標準規格の策定、会員のコミュニケーション支援などを行っています。

シニアメンバーは、全会員の約10%。IEEE会員の中でも最高レベルのグレード。昇格には、「IEEE関連分野の技術者・科学者・教育者・技術管理者で、少なくとも10年間専門的業務に携わり、そのうち5年間にわたり重要な業績を挙げている者」が条件となっています。

今回の昇格はこれまでの業績に加えて継続的な貢献が期待されるとともに、次世代のイノベーターを見出し、未来を築く新たな才能の発掘と育成にも期待されています。

## 第37回全日本理工科系 学生空手道選手権大会開催



去る9月29日(日)、国立オリンピック記念青少年総合センターで第37回全日本理工科系学生空手道選手権大会が開催されました。今年は、本学が主管校であったため未来ロボティクス学科の大川茂樹教授が大会長を務めました。

本学の戦績は下記のとおりです。

### 【男子団体組手】 準優勝

竹内匠(プロジェクトマネジメント学科3年)/松並快歩(同学科4年)/三浦誠司(同学科4年)/風間翔英(同学科3年)/山下慎平(金融・経営リスク科学科3年)/野田陽平(経営情報科学科2年)/井上陽太(デザイン科学科1年)

### 【男子団体形】 優勝(雲手)

風間翔英/堀颯斗(電気電子工学科2年)/西田修都(経営デザイン科学科1年)



## 海外研修

参加プログラム

### アメリカ英語研修プログラム

河原 夢乃 さん

創造工学研究科 デザイン科学専攻 修士課程 1年

研修先

カリフォルニア大学アーバイン校

研修期間

2024年8月5日(月)～8月30日(金)

## 失敗を恐れずチャレンジすることが自信につながった1か月



### 文化の違いを楽しむことがホームステイ成功のコツ

接客のアルバイトをしている中で、海外の方と会話をする機会が増え、もっと自分の気持ちを伝えられるようになりたいという思いがどんどん強くなり、アメリカ英語研修プログラムに参加しました。

このプログラムでは宿泊がホテルではなく、ホームステイ。ホストファミリーとのコミュニケーションはもちろん1か月という長期滞在に正直不安も感じていました。しかし、不安は現

地に行った途端、安心に変わりました。ホストマザーとの会話は楽しく、想像以上に充実した日々を過ごすことができました。また、このホームステイを通して、日本とアメリカの生活文化の違いを知ることができたのも貴重な経験となりました。私のホストマザーはキリスト教徒でしたので、食前のお祈りを習慣としています。もちろん私もそれに倣い、神様に感謝をして食事をいただきました。文化の違いをネガティブに捉え

るのではなく、「おもしろい!興味深い!」というポジティブな気持ちで理解することが、ホームステイを楽しむポイントになるのだと思います。

### 他者を認めながら、自分の軸を持つ姿勢を大切にしたい

また、アメリカには「他者を認め合う文化」と「自分の意見をはっきり言う文化」が混在していることも印象に残りました。カリフォルニアのディズニーパークを訪れた時、すれ違った人々が洋服を褒めてくれました。日本では道ですれ

違った知らない人に声をかけてもらうことはありません。驚きながらも自分のファッションが認められたことに、うれしさを感じました。

一方で、ホストマザーとの会話の中で、『メリーポピンズ』の話題になった際、マザーは2作目より1作目の方が好きだと話しました。しかし、「あなたが見たいなら一緒に観るわよ」と言ってくれました。日本では自分の本当の意見を言わずに相手にただ合わせることが多いのですが、マザーのようにはっきりと自分の意見を伝えた上で、相手に歩み寄ることが大切だと感じました。

### リスニング力と会話力が鍛えられた語学研修

カリフォルニア大学アーバイン校での授業に参加したの頃は、先生の話すスピードが早く、英語を日本語に変換するという作業で手一杯の状態。しかし、毎日繰り返し英語で会話をしていくうちに、リスニング力や英語に対する瞬発力が鍛えられ、日に日に先生の話をスムーズに理解できるようになりました。研修に参加したことで、上手に話すことより、伝えようとする姿勢が大切だと学び、「コミュニケーション」の楽しさを知ることができました。今後も英語を積極的に学んでいきたいと考えています。



## 新習志野キャンパスで 寮祭「Share」を盛大に開催!

10月6日(日)、新習志野キャンパス12号館前広場にて、寮祭が開催されました。今年のテーマは「Share」。当日は快晴に恵まれ、多くの来場者が訪れました。寮生各階や自治会ごとに準備した出店には、焼きそばや綿あめ、ホットドッグといったお祭りの定番グルメが並び、大人気となりました。また、輪投げや射的など、誰もが楽しめるミニゲームも用意され、子どもから大人まで笑顔が絶えないひとときとなりました。

さらに、今年の寮祭を大いに盛り上げたのは、多彩なステージイベント。昨年を上回る数の団体が出演し、ダンスパフォーマンスや音楽演奏、ユニークなパフォーマンスが披露されました。運営スタッフ一人ひとりの努力が実を結び、参加者同士が笑顔を交わし合いながら共有したこの特別な時間は、寮祭のテーマである「Share」を体現したものとなりました。



盛り上がったステージライブ



## 体験記



参加プログラム

## モンゴルサマースクール インターンシップ

ともひろ  
松田 委大 さん  
工学部 機械工学科 2年

研修先

新モンゴル学園

研修期間

2024年7月29日(月)～8月23日(金)



## 日本から飛び出してみたら唯一無二の体験ができました

SNSの情報ではわからない  
リアルなモンゴルを実感

以前から海外研修に興味を持っていました。そんな中、モンゴルのインターンシップの存在を知り、費用が安いこと、現地の日本人スタッフが生活をサポートしてくれること、そして何より「日本語教師としてモンゴルの高校生に日本語を教える」という他のプログラムにはない研修内容に魅力を感じました。

渡航前までは、モンゴルといえば遊牧民と移動式住居のイメージしかなく、日本とは全く違う文化の国だろうという認識しかありませんでした。しかし、実際に赴いてみると、研修先のあるウランバートル市には高層ビルが立ち並び、主な移動手段はなんと車両。海外の飲食店も多く参入していて、グローバル化が進む都市だったのです。モンゴルより日本の方が高い生活水準だろうと勝手に思い込んでいた自分にとって、さ

ほど違いがないという事実は大きな驚きでしたし、一番の学びとなりました。SNSの普及で、日本にいながらさまざまな情報を簡単に入手できる時代になり、世界の国々についても知った気になっていましたが、やはり実際に行ってみないと分からないことがあるということを改めて認識することができました。

ネイティブと非ネイティブの  
感覚のズレを認識できた

研修中は日本語のみを使ってモンゴルの生徒に授業をするため、日本語のレベルを相手に合わせる必要があります。最初は、「ゆっくり」「はっきり」と話せば伝わると思っていました。しかし、そうではありませんでした。彼らにとって、熟語やオノマトペは非常に難しく、これらの使用を避ける必要があったのです。日本語の全体像を捉え、非ネイティブにとっての日本語の難しさとは

何かを考え、適切にやさしい日本語に言い換えることが求められていたのです。ネイティブとして日本語を教えに来ているのに、自分が日本語という言語について全く知らなかったということに気付かされた瞬間でした。

自分が英語を学んでいる時、フレーズごとの細かいニュアンスの違いがよく理解できず、ネイティブの感覚を知りたいと感じる場面があったのですが、ネイティブと非ネイティブの感覚の違いを、ネイティブ側の視点から知ることができたのは、とても新鮮な発見でした。

これまでは「何となく日本に住み続けるのは嫌だ」と漠然と考えていましたが、今回のインターンシップ体験を経て、嫌なのは日本の社会制度であって、日本そのものではないことに気が付きました。「日本の素晴らしい文化を世界に紹介して、世界と日本の橋渡しができるような仕事をしたい、そのために海外に行く!」という将来のビジョンを明確にすることができました。



モンゴルの観光名所亀石の写真



自分が担任をしたクラスのみんなどの集合写真



修了式での参加したインターン生と現地の先生達



いろいろなフルーツで水飴づくり



体力テストでジャンプ!



心地よいギターの音色



ふわっと熱々のたこ焼き



地域の方々もたくさん参加



吹奏楽部NOISEによる演奏



令和7年度新寮長の森戸憲心さん(PM3・左)と前寮長の梶田優さん

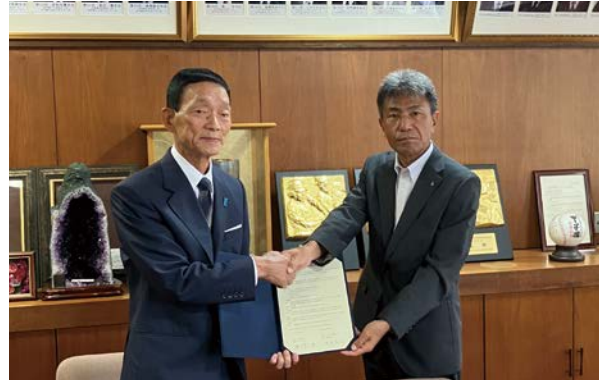
## 熊本県内2校と包括的連携協定を締結

本学(理事長:瀬戸熊修)は、10月16日(水)、熊本県立熊本工業高等学校(校長:野崎康司)および学校法人玉名学園(理事長:田中實)と、それぞれ包括的な連携協定を締結しました。協定式は両校の校内で行われ、教育・研究の発展、探究活動の推進、人材育成など幅広い分野での協力体制を構築することが正式に確認されました。

熊本工業高等学校は、明治31年(1898年)に設立された歴史ある学校で、工業系学科10科を擁し、熊本県内トップクラスの就職実績を誇ります。今回の協定に基づき、本学は同校に対して半導体分野や宇宙分野など、最先端の教育プログラムを提供します。この取り組みを通じて、高度な技術力と専門知識を備えたスペシャリストを育成し、熊本県内における産業の成長と地域活性化を目指します。

一方、専修大学熊本玉名高等学校は、昭和24年(1949年)に設立された専修大学の西日本唯一の付属高校で、DX(デジタルトランスフォーメーション)加速化推進事業にも採択されています。今回の協定では、デジタル技術分野における教育連携を強化し、未来の成長分野を担う人材の育成を目指します。また、生徒の進学支援やキャリア構築の充実も期待されています。

これらの協定を通じ、千葉工業大学は地域産業や社会全体の発展に寄与する次世代のリーダー育成に向け、熊本の教育現場と密接に連携し、新たな価値創造を目指していきます。



瀬戸熊理事長(左)と熊本工業高等学校の野崎校長



専修大学熊本玉名高等学校の田中理事長(左)と瀬戸熊理事長

### 同窓会



この4月から新学部学科体制がスタートした。そんな中、二度の入院を経験し、今年度は初めから戸惑いの連続となった。まだ時折不調を訴えることもあるが、大変な時期を乗り越えることができたのは、周りの教職員スタッフや家族の支援のおかげである。お世話になった方々には感謝の念が堪えない。気づけば津田沼キャンパスにはたくさんさんの提灯が並び、学生たちが主役となる津田沼祭を迎える季節となった。津田沼祭は学生が大きく成長する行事の一つとなっているため、毎年この時期を楽しみにしている。一方、津田沼祭では大学の様子を伺いつつ学生時代に想いを馳せて足を運ぶOBがたくさんおり、サークルや研究室の同窓会が数多く開かれる。今年はこの期間にホームカミングデイも開催されるため、例年に比べて多くの同窓生が集まることが予想される。コロナ禍が過ぎて以前のような日常が訪れ、数多くの同窓生が集まることに喜びを感じる。今年はまだ難しいが、来年はまた自分もその中の一人としてこの時期を楽しめるようになりたい。

高度応用情報科学科 中川 泰宏

### 四季雑感



秋はどこに行った。何事も飽きがかないのはいいことではあるが、どうせもうしばらくすると寒い寒いと節操もないことを言っているだろうと思っていたら11月になって少しだけ寒くなってきた。

それにしても10月の日本の平均気温はこれまでの最高だった1998年の記録を大幅に塗り替え今年より2℃以上高く、観測史上1位の高さになったとのこと、こうも暑いと季節の感覚がなくなってくる。それでも気候が変化していようと季節毎の行事がある。この時期だといささか欧風ではあるがハロウィン。

本学のハロウィンは総務の通路を飾り付けして、当日は悪魔や魔女のカチューシャやジャックオーランタンのエプロンなど被り物等をして、ひまわり保育園の子供たちを迎え入れる。

子供たちが来てくれるだけで和むが、大人が子供たちの笑顔(泣き出す子もいたが)を見て癒されるのはともかく、子供たちにとって楽しいひと時になってくれたらだろうか。来年もかわいい姿を見せてください。そういえばクリスマス会もあった。今年もサンタの格好をして癒されに行こう。

総務部(人事担当) 二階堂 卓寿

### 編集だより



今年の秋は、まるで夏の延長戦のように暑い日が続き、例年なら10月を目安に行う「衣替え」のタイミングがなかなかつかめなかったのではないだろうか?私に至っても「そろそろ衣替えかな?」と思いつつ暑さに負けてなかなか実行に移せず、結局10月後半まで半袖を駆使して過ごしていました。

そんなこんなで遅ればせながらの衣替えを終え、タンスの引き出しを開けて厚手のセーターやストールを目にした、クローゼットに厚手のコートやダウンでパンパンになっている様子を見て、美しくはないけれど、冬支度の準備が整ったようで安心しています。

「衣替え」には、新しい季節を迎える準備というだけでなく「気持ちの切り替え」の役割もあるのだと思います。服装だけでなく、心の中も軽く整理し、これからの季節に向けてリフレッシュするにはとてもいい機会です。

日本の四季の豊かさを感じるとともに、皆さんもぜひ、自分らしい装いととも、秋から冬への移ろいを楽しんでください。

入試広報部 大橋 慶子